

夏とおじいさん

小川未明

青空文庫

ある街に、氣むずかしいおじいさんが住んでいました。まったく、独りぼっちでおりま
したけれど、欲深なものですから、金をためることばかり考えていて、さびしいとい
うことなど知りませんでした。

「おじいさんは、おひとりで、おさびしくありませんか？」と、独り者のおじいさんの身
の上を思つて、なぐさめるものと、

「仕事にいいから、そんなことは考えませんよ。」と、おじいさんは、さびしいと
か、さびしくないとかいうのは、閑人のいうことだとばかりに返事をしました。

「それは、お元気で、なによりけつこうなことです。」と、たずねた人は、金があるか
ら、さびしくないものとみえる、さすがに、金持ちはちがつたものだと思いました。

おじいさんは、雇い人を手足のごとく使いました。雇い人たちは、おじいさんの氣むず
かしやを知っていますから、せつせといいつけどおり働いたのです。そして、自分の思
つたように物事がうまくゆけば、にこにことして、おじいさんは、きげんがよかつたけ
れど、うまくゆかないときには、

「おまえは、氣がつかん、ばかだから。」といつて、がみがみしかつたのであります。

雇い人は、たまりかねて、

「あんなわからずやには、罰があたればいい。」と、思っていました。ところが、おじいさんはリユーマチの気味で、夏のはじめごろから、手足がよくきかなくなりました。

「とうとう、神さまが、罰をおあてなされたのだ。これからは、私どもにもやさしくしてくださいさるだろう。」と、雇い人たちは、いったのであります。

ところが、その反対で、体こそよく自由はきかなかつたが、ますます口やかましくなつて、それに自分が不自由で、思うようにならぬところから、かんしゃくを起こして、使っているものに、小言をいっただけです。

それでも、みんなは、「病人だから、だまっておれ。」と、我慢をしていました。日にまし、あつくなると、はえや蚊が、だんだん多く出てきました。はえは遠慮なく、おじいさんのはげた頭の上にとまりました。

「この畜生め。」といつて、おじいさんは、うちわを頭の上によつて、はえをたたこうとしました。はえは、すばしこく逃げて、また、おじいさんがじつとしていると、頭の上にきてとまりました。

「ふといやつだ、おれをからかっているな。」と、おじいさんは、顔を赤くして怒りました。

た。しかし、はえのことですから、怒おこつてみるだけで、どうすることもできません。

また、晩ばんになると、蚊かがやってきて、おじいさんを、ちくちくと刺さしました。

「おれが、手足てあしがきかないと思おもつて、蚊かまでがばかにする。」と、おじいさんは、怒おこつたのであります。

はえや、蚊かに對たいする腹はらだたしさが、つい雇やとい人のほうへまわってきましたから、たまりません。せめて、この夏なつの間あいだなり、涼すずしい山やまの温泉おんせんにでもまいられたらといつて、おじいさんにすすめました。

おじいさんは、いい考かんがえだといつて、喜よろこぶと思おもいのほか、

「仕事しごとのいそがしい体からだで、そんなところへゆけるものか？ 私わたしは、あのビルディングの五階かいの事務所じむしょで、夏なつを過すすつもりだ。」と、答こたえました。

「なるほど、それは、いいお考かんがえでございます。」と、温泉行おんせんゆきをすすめた雇やとい人は、頭あたまをかいて下さがりました。

おじいさんは、いよいよビルディングへ移うつつて、高たかい五階かいの室しつで住すむようになってから、はたして、はえも、蚊かもこなければ、涼すずしい風かぜがはいて、それはけっこうでありました。「なぜ、早はやくここへこなかったらう。」と、おじいさんは、大おお喜よろこびでしたが、雇やとい人

は、ますます手足のごとく使われて、上がったり、下りたりするので、ほんとうにやりきれなくなりました。ちょうど、そのおりのことです。ビルディングのエレベーターに故障ができて、止まってしまった。その修繕には、五、六日間かかるそうです。雇い人たちは、頭を集めて、

「こんなときにでも、おじいさんを困らして、平常、手足のように働いている、みんなのありがたみを知らしてやれ。」と、相談しました。

それで、みんなが、仕事を休んでしまうと、体の自由がきかないおじいさんですから、まったく困ってしまいました。

「不埒のやつどもだ。よくも、私をひどいめにあわしたな。」と、おじいさんは、怒りましたけれど、よく考えれば、自分が無理だったので、いつでも、みんなが、自分のどんな命令でもきくものと思つたからです。

「そうだ。おれは、もつと謙遜にならなければならない。そして、人を信じなければならない。この世の中は、おたがいに助け合わなければならないところだ。」と、悟りました。おじいさんは腹がへると、かごの中へ、紙片に字を書いて、それといっしょに銭をいれて、細ひもで、するすると五階の窓から、下の通りへおろしました。その紙片には、

「もし、このお金で、パンを買って、この中へ入れてくださればしあわせです。そして、あなたの手間賃もお引きください。」と、書いてありました。

おじいさんは、しばらくして、かごを引き上げると、その中には、できたてのやわらかなパンがはいっていました。そして釣り銭も、ちゃんとはいっていたのです。

赤々とした、夏の太陽は、高いビルディングと、人の歩む白い路をいきいきと彩り、照らしていました。おじいさんは、正しい道を悟ったばかりに、それから、雇い人にも尊敬され、ひとりぼちでさびしくなく、体がきかなくても、何不自由なく、暮らすことができたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 8」講談社

1977（昭和52）年6月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「青空の下の原っぱ」六文館

1932（昭和7）年3月

初出：「國民新聞」

1931（昭和6）年7月12日

※表題は底本では、「夏《なつ》とおじいさん」となっています。

※初出時の表題は「夏とおぢいさん」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：津村田悟

2018年7月27日作成

2018年9月29日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

夏とおじいさん

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>